

Oracle® Solaris 11.1 ご使用にあたって

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel、Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1 始める前に	11
Oracle Solaris 11.1 について	11
インストールの考慮事項	12
Oracle Solaris 11.1 をインストールするためのシステム要件	12
Live Media のインストール後に root の初期パスワードの期限が切れている	13
SPARC: Oracle Solaris 11.1 をブートするためにシステムのファームウェアを更新する必要がある	14
Oracle VM Server for SPARC: 古いシステムファームウェア上では、ゲストドメインの自動インストールが遅くなるときに WAN がブートする	15
更新に関する考慮事項	16
システムの Oracle Solaris 11 から Oracle Solaris 11.1 への更新	16
Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11.1 への移行	17
実行時の考慮事項	18
Java に関する推奨事項	18
GCC 4.5.2 パッケージでは include-fixed ヘッダーファイルは提供されない	18
CLI メッセージのローカリゼーション	19
/usr/ccs/bin は /usr/bin へのシンボリックリンクになっている	19
passwd コマンドを使用してユーザーパスワードの状態を変える (7187165)	19
2 インストールに関する注意事項	21
Oracle Solaris 11.1 のインストール時の問題	21
多くのメモリーと少ないディスク容量が割り当てられたシステム上で、自動インストーラによるインストールが失敗する (7090030)	21
Oracle Solaris 11 イメージから作成された AI サービスによって Oracle Solaris 11.1 がインストールされる (7144329)	23
SPARC: T シリーズサーバーへの Oracle Solaris のインストール中の FMD エラー	

(16081077)	24
zoneadm install コマンドにディレクトリを渡すと、そのツリーの下にある重複した名前を持つプロファイルが削除される (7093399)	25
自動インストーラの構成プロファイルに Web サーバーからオープンにアクセスできる (7097115)	26
aimanifest コマンドを使用して新しい要素を追加する場合、直接の次の要素が見つからないと処理が失敗する (7093788)	27
デュアルパスのブートディスクを使用すると、自動インストーラによるターゲットディスクのマッチングが失敗する (7079889)	28
AI サーバーでの複数の AI サービス名の競合 (7042544)	29
テキストインストーラが、別の言語が選択されていても英語で表示される (7095437)	30
テキストインストーラでは、既存の Solaris2 パーティション内の別のスライスに Oracle Solaris をインストールすることはできない (7091267)	30
sysconfig およびテキストインストーラアプリケーションがタイムゾーン画面から予期しないかたちで終了する (7026383)	31
「自分の名前」フィールドに ASCII 以外の文字が指定されている場合、インストールに失敗する (7108040)	32
x86: 拡張ファームウェアインタフェースが有効な場合に Xorg VESA ドライバが Oracle VM VirtualBox で機能しない (7157554)	32
nge ドライバを含む x2100 プラットフォームでネットワークベースの自動インストーラが失敗する (6999502)	32
x86: 64 ビット: Oracle の Sun Fire x4170m3 および x4270m3 サーバーで DVD のインストールに失敗する可能性がある (7185764)	33
ハードウェア関連の問題	34
x86: 初期のカーネルブートフェーズ中に Dell 製の一部のデスクトップが UEFI モードでハードハングする (7150035)	34
3 更新の問題	37
Oracle Solaris 11.1 への更新時の問題	37
更新後に、syslog が /etc/ail/aliases.db 別名データベースが古いと報告する (7096745)	37
Oracle Solaris 11 から Oracle Solaris 11.1 への更新時に /var/crash の内容がディレクトリに保持される (7174490)	38
64 ビット: iscsiadm ユーティリティーが発見アドレスを削除できない (7184125)	38
Fetchmail がインストールされている場合、Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12 またはそれ以降から Oracle Solaris 11.1 への更新に失敗する (7200467)	39
BIND がインストールされている場合、Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12 または	

それ以降から Oracle Solaris 11.1 への更新に失敗する (7203326)	39
SPARC: ゾーンを含むシステムで Oracle Solaris 11 SRU 10 からの更新に失敗する (7192769)	40
4 実行時に関する注意事項	41
ファームウェアに関する問題	41
x86: マスターブートレコードの EFI_PMBR エントリがアクティブでない場合に BIOS ファームウェアを含む一部のシステムがブートしない (7174841)	41
SPARC: GPT ラベル付きディスクのサポート	42
x86: ISO イメージからの UEFI モードでのブートが非常に遅い	43
x86: 4G バイトの Emulex および Qlogic 製 FC HBA カードを搭載した 2T バイトを超える LUN/ディスクを含むディスクで Oracle Solaris がブートしない (7187083、7188696)	43
システム構成に関する問題	44
カスタム SMF サイトプロファイルをサブディレクトリ内に配置する必要がある (7074277)	44
-c オプション付きの sysconfig configure コマンドでディレクトリ構造がフラット化される (7094123)	44
SPARC: システムが iSCSI ストレージアレイ上の iSCSI LUN のブートに失敗する (7148479)	45
ファイルシステムに関する問題	46
zfs set/inherit mountpoint が Oracle Solaris 10 ブランドゾーンに関する失敗メッセージを表示する (7195977)	46
ZFS 関連のパニックのせいでシステムが継続的にリブートする (7191375)	46
Oracle Solaris システムで新しい Advanced Format のディスクドライブに置き換えるか、それを使用すると、問題が発生する	47
システム管理に関する問題	48
HCA DR 操作を成功させるためには RDSv3 のサポートが必要である (7098279) ..	48
zoneadm attach コマンドが、-a および -n オプションの使用時にハングアップする可能性がある (7089182)	49
分割されたマニフェストで svccfg validate コマンドが失敗する (7054816)	50
SPARC: SP が縮退モードの場合にシステムのブートが失敗する (6983290)	50
OpenMP アプリケーションで散発的な実行時の障害が発生する (7088304)	51
32 ビット: YMM および浮動小数点レジスタに対して PCSXREG が EINVAL エラーをトリガーする (7187582)	51
同じ volname を持つ 2 つのディスクが存在する場合に対話型インストーラによって間違ったディスクが選択されることがある (7195880)	52
作成後に FCoE ポートがオンラインにならない (7191873)	52

間違った ASR プロパティが指定された場合に <code>asr-notify</code> が保守モードになる (7195227)	53
x86: <code>cfgadm -c configure</code> および <code>hotplug enable</code> コマンドがホットプラグスロット または PCIe EM スロットの構成に失敗する (7198763)	53
ネットワーク接続に関する注意事項	54
SPARC: T2 および T3 シリーズのプラットフォームで IPsec パケットが欠落するこ とがある (7184712)	54
ネットワークトラフィックとのインタフェースに対する <code>tshark</code> コマンドの実行 時にシステムがハングアップすることがある (7202371)	54
インストール後はじめて Automatic NCP から DefaultFixed NCP に切り替えると ネットワークに到達できなくなる (15824547)	55
デスクトップに関する問題	56
新規インストール後に Evolution アプリケーションがクラッシュする (7077180)	56
SPARC: USB キーボード、マウス、および物理モニターに関するデスクトップの 問題 (7024285)	56
D-Bus システムデーモンに設けられた Sun Ray または XDMCP サーバーの使用に 対するファイル記述子の上限が小さい (7194070)	57
グラフィックスと画像処理に関する問題	58
x86: NVIDIA グラフィックスチップセット上でビットマップコンソールが正しく 表示されない (7106238)	58
x86: X サーバーを UEFI モードで起動すると、バンドル版のドライバがパニック になる (7116675)	58
パフォーマンスに関する問題	60
x86: <code>stmsboot</code> コマンドを <code>-e</code> オプション付きで実行したあとに ZFS プール情報が 無効になる (7168262)	60
SSD デバイスのプールにかかるキャッシュされないランダム書き込みワーク ロードのパフォーマンスが低い (7185015)	60
ハードウェアに関する問題	60
x86: システムのブート中に CPU の電源レベル警告が表示される (7146341)	61
SPARC: Fujitsu M10 システムで <code>hotplug</code> によって PCI ボックス上のデバイスを構成 できない (7196117)	61
ローカリゼーションに関する注意事項	62
UTF-8 以外のロケールで、非 GTK アプリケーションから ATOK 言語エンジンへ の接続が失敗する (7082766)	62
A 以前に記載され、 Oracle Solaris 11.1 リリースで修正されているバグ	63
以前に記載され、このリリースで修正されたバグ	63

はじめに

『Oracle Solaris 11.1 ご使用にあたって』では、Oracle Solaris 11.1 オペレーティングシステム (OS) をインストールまたは実行する前に考慮すべき、インストール、更新、および実行時に関するいくつかの重要な情報を提供します。このリリースでのいくつかの既知の問題と、回避方法が存在する場合はその回避方法について説明します。また、以前のリリースについて記載された修正済みのバグの一覧も含まれています。

このリリースの新機能については、「Oracle Solaris 11.1 の新機能」を参照してください。

ソフトウェアのサポート中止の宣言については、<http://www.oracle.com/technetwork/systems/end-of-notice/eonsolaris11-392732.html> を参照してください。

注 - この Oracle Solaris のリリースでは、SPARC および x86 系列のプロセッサアーキテクチャを使用するシステムをサポートしています。サポートされるシステムは、[Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists](#) に記載されています。このドキュメントでは、プラットフォームにより実装が異なる場合は、それを特記します。

対象読者

本書は、Oracle Solaris 11.1 OS をインストールして使用するユーザーとシステム管理者向けです。

内容の紹介

このドキュメントには、次の情報が含まれています。

第1章「始める前に」では、Oracle Solaris 11.1 の概要情報を提供するほか、Oracle Solaris 11.1 をインストールまたは実行する前に考慮する必要のあるインストール、更新、および実行時に関する一般的な情報についても説明します。

第2章「インストールに関する注意事項」では、Oracle Solaris 11.1 のインストール中に発生する可能性のある問題について説明します。

第3章「更新の問題」では、Oracle Solaris 11.1 への更新中に発生する可能性のある問題について説明します。

第4章「実行時に関する注意事項」では、Oracle Solaris 11.1 の実行中に発生する可能性のある問題について説明します。

付録 A 「以前に記載され、Oracle Solaris 11.1 リリースで修正されているバグ」には、『Oracle Solaris 11 ご使用にあたって』に記載され、Oracle Solaris 11.1 リリースで修正されているバグが一覧表示されています。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通じて電子的なサポートを利用することができます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照してください。聴覚に障害をお持ちの場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

表記上の規則

次の表では、このドキュメントで使用される表記上の規則について説明します。

表 P-1 表記上の規則

字体	説明	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
<i>aabbcc123</i>	プレースホルダ: 実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。

表 P-1 表記上の規則 (続き)

字体	説明	例
AaBbCc123	書名、新しい単語、および強調する単語を示します。	『ユーザーズガイド』の第6章を参照してください。 キャッシュは、ローカルに格納されるコピーです。 ファイルを保存しないでください。 注: いくつかの強調された項目は、オンラインでは太字で表示されます。

コマンド例のシェルプロンプト

Oracle Solaris OS に含まれるシェルで使用する、UNIX のシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを次に示します。コマンド例では、シェルプロンプトはコマンドが標準ユーザーまたは特権ユーザーのどちらによって実行されるべきかを示しています。

表 P-2 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェル	\$
Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェルのスーパーユーザー	#
C シェル	machine_name%
C シェルのスーパーユーザー	machine_name#

始める前に

この章では、Oracle Solaris 11.1 オペレーティングシステム (OS) の概要情報を提供するほか、Oracle Solaris 11.1 をインストールまたは実行する前に考慮する必要のあるインストール、更新、および実行時に関する一般的な情報についても説明します。インストール、更新、および実行時の考慮事項が、この章ですべて説明されているわけではないことに注意してください。

注 - Oracle の Sun システム障害情報は、Oracle のバグデータベースに移行されました。結果として、サポート契約をお持ちのお客様は My Oracle Support (MOS) を使用して BugDB のバグ ID (以前の CR) でバグ情報を検索できるようになりました。詳細は、MOS で使用できる [Sun システム障害情報のオラクルバグデータベースへの移行 \(Doc ID 1501467.1\)](#) のナレッジ記事を参照してください。

Oracle Solaris 11.1 について

Oracle Solaris 11.1 は、Oracle Solaris 11 11/11 の最初の更新リリースです。Oracle Solaris 11.1 は、大規模なクラウド環境や企業のデータセンターでサービスをセキュアかつ迅速に配備する Oracle Solaris 11 の機能を基に構築されています。

Oracle Solaris 11.1 は、簡素化された管理、設計済みの仮想化による迅速なアプリケーションプロビジョニング、スケーラブルなデータ管理を使用したデータ完全性、および高度な保護を含む、いくつかの新機能を提供しています。Oracle Solaris 11.1 の最新の機能についての詳細は、『Oracle Solaris 11.1 新機能』を参照してください。

Oracle Solaris 11.1 OS を使用するとき、または Oracle Solaris 11.1 OS に更新するとき、次の表に記載されたドキュメントを参照してください。

表1-1 より詳細な情報の記載箇所

トピック	参考
Oracle Solaris 11.1 のインストールと設定	『Oracle Solaris 11.1 システムのインストール』
Oracle Solaris 11.1 ネットワークの確立	『Oracle Solaris 11 ネットワーキングの紹介』
Oracle Solaris 11.1 システムの管理	『Oracle Solaris 11.1 でのシステム情報、プロセス、およびパフォーマンスの管理』
サポートリポジトリへのアクセス	https://pkg-register.oracle.com/
初期のソフトウェアリリースリポジトリへのアクセス	http://pkg.oracle.com/solaris/release/
BugDB 内のバグ情報へのアクセス	Sun Systems Defects Move to Oracle's Bug Database (Doc ID 1501467.1)
ソフトウェアのサポート中止の宣言	http://www.oracle.com/technetwork/systems/end-of-notice/eonsolaris11-392732.html
Oracle Solaris 11.1 のすべてのドキュメント	http://docs.oracle.com/cd/E26502_01/index.html

注-ハードウェア構成によっては、Oracle Solaris OS のインストール時に別途作業が必要になることがあります。Oracle Solaris の追加のインストールドキュメントについては、ハードウェアのドキュメントを確認してください。

インストールの考慮事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 のインストール時に考慮する必要のある一般的な情報を提供します。

Oracle Solaris 11.1 をインストールするためのシステム要件

Oracle Solaris 11.1 をインストールする前に、次のメモリーとディスク容量の要件を確認してください。

注 - この表では、Oracle Solaris 11.1 の初期インストールを実行するための最小要件と推奨要件の一覧を示します。インストール後のシステムで追加のメモリーやディスク容量が必要になる場合もあります。

表 1-2 インストールシステムの要件

インストールプログラム	最小メモリー	最小ディスク容量	推奨される最小ディスク容量
自動インストーラ	1G バイト (x86) 1.5G バイト (SPARC)	自動インストールに必要な最小ディスク容量は、インストールに含まれるパッケージの数やサイズによって変わります。	13G バイト
Live Media	1.5G バイト (x86)	5G バイト	7G バイト
テキストインストーラ	1G バイト (x86) 1.5G バイト (SPARC)	2.9G バイト (x86) 2.8G バイト (SPARC)	4.9G バイト (x86) 4.8G バイト (SPARC)

サポートされるシステムやプラットフォームタイプ間の実装の違いについては、<http://www.oracle.com/webfolder/technetwork/hcl/index.html> の『Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists』を参照してください。

Live Media のインストール後に root の初期パスワードの期限が切れている

Live Media のインストール後、root のパスワードは最初、インストール中に作成されたユーザーアカウントと同じパスワードに設定されていますが、これは期限切れの状態で作成されています。はじめて root 役割になるときは、独自のパスワードを使用して認証を行うようにしてください。この時点でユーザーは、ユーザー root のパスワードの期限が切れていることを示すメッセージを受け取り、新しいパスワードの入力を要求されます。

GNOME のメニュー項目から管理コマンドを起動したあとで root 役割になることを求められた場合、新しい root パスワードの入力も求められます。su コマンドを使用して役割になる場合のコマンドシーケンスは、次のようになります。

```
$ su
Password:
su: Password for user 'root' has expired
New Password:
Re-enter new Password:
su: password successfully changed for root.
```

SPARC: Oracle Solaris 11.1 をブートするためにシステムのファームウェアを更新する必要がある

一部の SPARC システムでは、Oracle Solaris 11.1 をブートするためにファームウェアの更新が必要です。更新されていないシステムでは、システムのブート時に次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
os-io Cross trap sync timeout:
```

回避方法: Oracle Solaris 11.1 OS をインストールする前に、影響を受けるシステムのファームウェアを表 1-3 に記載されたバージョンに更新します。次の表は、Oracle Solaris 11.1 を実行するときに、影響を受ける SPARC システムに必要な最小ファームウェアレベルを示しています。

表 1-3 SPARC システムに必要なファームウェアレベル

SPARC プラットフォーム	ファームウェアリビジョン	パッチ
T2000	6.7.11	139434-08
T1000	6.7.11	139435-08
Netra T2000	6.7.11	139436-07
Netra CP3060	6.7.11	なし
T6300	6.7.11	139438-08
T5120/T5220	7.4.0.b	147307-01
T6320	7.4.0.b	147308-01
Netra T5220	7.4.0.b	147309-01
Netra CP3260	7.4.0.b	なし
T5140/T5240	7.4.0.b	147310-01
T5440	7.4.0.b	147311-01
T6340	7.4.0.b	147312-01
Netra T5440	7.4.0.b	147313-01
Netra T6340	7.4.0.b	147314-01
T3-1	8.1.0.c	147315-02
T3-2	8.1.0.c	147316-02
T3-4	8.1.0.c	147317-02
T3-1B	8.1.0.c	147318-02

表 1-3 SPARC システムに必要なファームウェアレベル (続き)

SPARC プラットフォーム	ファームウェアリビジョン	バッチ
Netra T3-1	8.1.0.c	147319-02
Netra T3-1B	8.1.0.c	147320-01
Netra T3-1BA	8.1.0.c	なし
M3000	1102	12573531
M4000	1102	12573537
M5000	1102	12573539
M8000	1102	12573543
M9000	1102	12573546

T4 システムはファームウェアバージョン 8.1.4 とともにリリースされたため、Oracle Solaris 11.1 をブートするためのファームウェアのアップグレードが一切必要ないことに注意してください。SPARC システムで必要となるファームウェアレベルの詳細については、[My Oracle Support](#) を参照してください。

Oracle VM Server for SPARC: 古いシステムファームウェア上では、ゲストドメインの自動インストールが遅くなる時に WAN がブートする

Oracle 製の SPARC T シリーズサーバーのユーザーは、古いバージョンのシステムファームウェアを実行している場合、ゲストドメインの自動インストール中に遅い WAN ブートを経験する可能性があります。

回避方法: システムファームウェア 8.x の場合は、少なくともバージョン 8.1.1.b 以上が必要です。システムファームウェア 7.x の場合は、少なくともバージョン 7.4.0.d 以上が必要です。次の情報は、プラットフォームと必要なファームウェアバージョンを示しています。

システムファームウェア 8.x は、次のプラットフォームをサポートしています。

- Netra SPARC T3-1
- Netra SPARC T3-1B
- Sun SPARC T3-1
- Sun SPARC T3-2
- Sun SPARC T3-4
- Sun SPARC T3-1B
- Sun SPARC T4-1
- Sun SPARC T4-1B

- Sun SPARC T4-2
- Sun SPARC T4-4

システムファームウェア 7.x は、次のプラットフォームをサポートしています。

- Sun SPARC Enterprise T5120
- Sun SPARC Enterprise T5140
- Sun SPARC Enterprise T5220
- Sun SPARC Enterprise T5240
- Sun SPARC Enterprise T5440
- Sun Blade T6320 - Sun Blade T6340

次のプラットフォームでは、必要なファームウェアバージョンを利用できません。

- Netra CP3260
- Netra SPARC T3-1BA

システムファームウェアの特定のバージョンの詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-sparc-194287.html> で入手できる『Oracle VM Server for SPARC リリースノート』を参照してください。

更新に関する考慮事項

このセクションでは、システムを Oracle Solaris 11.1 に更新するときに考慮する必要のある情報について説明します。Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11.1 に移行する場合は、17 ページの「Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11.1 への移行」を参照してください。

システムの Oracle Solaris 11 から Oracle Solaris 11.1 への更新

Oracle Solaris 11 を Oracle Solaris 11.1 に更新するには、pkg コマンド行ユーティリティを使用します。詳細は、pkg(1) のマニュアルページを参照してください。

注 - BIND または Fetchmail がインストールされている Oracle Solaris 11 SRU 12 またはそれ以降を実行している場合、更新プロセスは失敗します。この問題を解決するには、バグ [7203326](#) および [7200467](#) の回避方法を参照してください。

▼ Oracle Solaris 11 を Oracle Solaris 11.1 に更新する方法

- 1 Oracle Solaris 11.1 への更新に必要なパッケージを使用して Oracle Solaris 11 システムを更新します。

```
# pkg update --accept
```


- システムがサポート契約下であり、Oracle Solaris 11 Support Repository Update 10.4 またはそれ以降を使用して動作していない場合、このコマンドはシステムのソフトウェアを更新します。
- システムがサポート契約下でない場合、このコマンドは更新を行うのに必要なパッケージを使ってシステムを更新します。

どちらの場合も、新しく更新されたパッケージによって新しいブート環境が作成されます。

- 2 新しいブート環境を有効にするためにシステムをリブートします。

```
# reboot
```

- 3 正しいパッケージがシステムにインストールされていることを確認します。

```
# pkg update package/pkg
```

- 4 システムを **Oracle Solaris 11.1** に更新します。

```
# pkg update --accept
```

新しいブート環境が作成され、必要な新しいパッケージがインストールされます。

- 5 新しいブート環境を有効にするためにシステムをリブートします。

```
# reboot
```

参照 Oracle Solaris 11.1 に更新する詳細な手順については、次のドキュメントを参照してください。

- [Oracle Solaris 11.1 へのアップグレード](#)
- [How to Update to Oracle Solaris 11.1 Using the Image Packaging System](#)

Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11.1 への移行

Oracle Solaris 10 システムを Oracle Solaris 11 または Oracle Solaris 11.1 に直接更新することはできません。既存のインストールオプションを使用して、Oracle Solaris 11.1 の新規インストールを実行する必要があります。ただし、Oracle Solaris 10 OS のインスタンスまたはゾーンを Oracle Solaris 11.1 システムに移行することはできます。

詳細は、『[Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11.1 への移行](#)』を参照してください。

実行時の考慮事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 OS の実行中に考慮する必要のある一般的な情報を提供します。

Java に関する推奨事項

Oracle Solaris 11.1 でのデフォルトの Java 環境は Java 7 Update 7 です。最新の機能、セキュリティ、およびパフォーマンス向上を得るために、お客様には最新の Support Repository Update (SRU) を使用して更新することをお勧めします。機能拡張については、各 Java 7 Update の [リリースノート](#) に詳しく説明されています。最新の Oracle Solaris システムで実行する Java 7 の重要な拡張機能の 1 つの例として、Java 7 Update 4 では、新しい OracleUcrypto プロバイダが導入されています。これは、SPARC T4 以降のプラットフォーム上で、CPU 負荷を最小限に抑えながらパフォーマンスを最大にするために、ネイティブ(シリコン内)暗号化機能に直接アクセスします。

また、Oracle Solaris 11.1 には Java 6 Update 35 も付属しています。Java 6 のパブリック更新は発行されなくなりました。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/java/eol-135779.html> を参照してください。Java SE プラットフォーム用の Oracle Premier Support を利用できます。Java サポートの予定がなく、まだ Java 7 に移行していないお客様は、Java SE の以前のリリースのサポートに関する追加情報について Java SE サポートロードマップを確認されることをお勧めします。

GCC 4.5.2 パッケージでは **include-fixed** ヘッダーファイルは提供されない

GCC 4.5.2 パッケージでは、**include-fixed** GCC インストールディレクトリ内にヘッダーファイルが自動生成されません。ANSI 互換でないヘッダーファイルを含むアプリケーションのビルド時に、コンパイラのエラーメッセージが表示される可能性があります。

回避方法: 影響を受けるヘッダーファイルを生成するには、次のコマンドを入力します。

```
# processor='uname -p'  
# [ $processor = "i386" ] && platform="pc" || platform="oracle"  
# /usr/gcc/4.5/lib/gcc/$processor-$platform-solaris2.11/4.5.2/install-tools/mkheaders
```

CLI メッセージのローカライゼーション

コマンド行インタフェース (CLI) のメッセージは、すべてがローカライズされているわけではありません。オペレーティングシステム CLI コンポーネントのためのメッセージは不完全にローカライズされているため、デフォルトではインストールされなくなりました。

回避方法: オペレーティングシステム CLI コンポーネントのためのメッセージを表示するには、`system/osnet/locale` パッケージを手動でインストールします。

`/usr/ccs/bin` は `/usr/bin` へのシンボリックリンクになっている

`/usr/ccs/bin` ディレクトリは `/usr/bin` へのシンボリックリンクです。

この変更のため、たとえば `PATH` 環境変数内の `/usr/ccs/bin:/usr/gnu/bin:/usr/bin` というパスは、`/usr/bin:/usr/gnu/bin` と同等になりました。この変更により、`PATH` 検索によって見つかるユーティリティも変わる可能性があります。

`/usr/ccs/bin` の変更によって GNU ユーティリティの検索に問題が発生する場合には、`PATH` 環境変数の並びを見直して `/usr/gnu/bin` を `/usr/bin` よりも前に配置する、またはユーティリティをフルパスで呼び出すようにしてください。

`passwd` コマンドを使用してユーザーパスワードの状態を変える (7187165)

Oracle Solaris 11.1 以降、Oracle Solaris 11 で許可されていなかったパスワードの状態遷移のいくつかが承認ユーザーに対して復元されました。特に、`passwd` コマンドを使用した、次のパスワードの状態遷移が Oracle Solaris 11.1 で許可されるようになりました。

- `passwd username` を使用した、UNIX 以外の認証アカウントへのパスワードの割り当て。
- パスワードを持つアカウントの、UNIX 以外の認証アカウントへの直接の変換。
- UNIX 以外の認証状態にあるアカウントを手動でロックおよびロック解除する機能。この場合、`passwd -sa` コマンドはアカウントに対して `NL` を示します。

これらのパスワードの状態遷移は、Oracle Solaris の以前のリリース (Oracle Solaris 11 を除く) でサポートされていました。

注- ロックされた状態にあるアカウントに新しいパスワードを割り当てるには、`passwd -u` コマンドを使用した明示的なロック解除が引き続き必要です。また、`passwd -N` コマンドで UNIX 以外の認証アカウントとしてマークされるアカウントでは、失敗したログインのカウントは増加しません。

詳細は、`passwd(1)` のマニュアルページを参照してください。

インストールに関する注意事項

この章では、Oracle Solaris 11.1 のインストール中に発生する可能性のある問題について説明し、回避方法が利用できる場合はその回避方法を提示します。

Oracle Solaris 11.1 のインストール時の問題

Oracle Solaris 11.1 のインストール中またはインストール後に、次の問題が発生する可能性があります。

多くのメモリーと少ないディスク容量が割り当てられたシステム上で、自動インストーラによるインストールが失敗する (7090030)

自動インストーラ (AI) を使用して Oracle Solaris をインストールする場合、システムの物理 RAM の量がディスク容量よりも多いと、インストールが失敗する可能性があります。スワップデバイスやダンプデバイスに領域を割り当てると、OS のインストールに使用できる容量が少なくなる可能性があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
ImageInsufficientSpace: Insufficient disk space available (8.84 GB) for  
estimated need (9.46 GB GB) for Root filesystem
```

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- ディスクのサイズに制限がない場合は、ルートプール内の `vdev` として使用されるスライスに、より多くの領域を割り当てます。

注-x86 システムの場合は必要に応じて、Solaris2 パーティションに追加領域を割り当てます。

- ダンプボリュームとスワップボリュームを割り当てないですむようにします。AI マニフェスト内で、<target> セクションの <logical> タグの nodump 属性と noswap 属性に値 true を指定します。例:

```
<logical noswap="true" nodump="true">
</logical>
```

- マニフェスト内で、zpool を定義し、より小さいサイズのスワップとダンプを割り当てます。

```
<target>
  <disk whole_disk="true" in_zpool="rpool">
    <disk_keyword key="boot_disk"/>
  </disk>
  <logical>
    <zpool name="rpool" root_pool="true">
      <zvol name="swap" use="swap">
        <size val="2gb"/>
      </zvol>
      <zvol name="dump" use="dump">
        <size val="4gb"/>
      </zvol>
    </zpool>
  </logical>
</target>
```

- スワップデバイス、ダンプデバイスのいずれかの割り当てを無効にし、残りのデバイス (ダンプまたはスワップ) に特定のサイズを割り当てます。次の例は、スワップを無効にし、4G バイトのダンプサイズを追加する方法を示したものです。

```
<target>
  <disk whole_disk="true" in_zpool="rpool">
    <disk_keyword key="boot_disk"/>
  </disk>
  <logical noswap="true">
    <zpool name="rpool" root_pool="true">
      <zvol name="dump" use="dump">
        <size val="4gb"/>
      </zvol>
    </zpool>
  </logical>
</target>
```

AI マニフェストを編集する方法についての詳細は、ai_manifest(4) のマニュアルページを参照してください。

Oracle Solaris 11 イメージから作成された AI サービスによって Oracle Solaris 11.1 がインストールされる (7144329)

Oracle Solaris 11 の AI イメージから作成されたインストールサービスのデフォルトの AI マニフェストには、<software_data> セクションに次のエントリが含まれています。

```
<name>pkg:/entire@latest</name>
```

このエントリには、AI マニフェストで指定されたパブリッシャーから利用できる最新リリースの Oracle Solaris オペレーティングシステム (OS) をインストールする効果があります。

Oracle Solaris 11 の AI マニフェストによって参照されるパッケージリポジトリに Oracle Solaris 11 と Oracle Solaris 11.1 の両方のシステムパッケージが含まれている場合、Oracle Solaris 11 インストールサービスは Oracle Solaris 11 ではなく Oracle Solaris 11.1 OS をインストールします。これは、それがそのリポジトリで利用できる最新リリースの Oracle Solaris OS であるからです。

参照されるパッケージリポジトリに Oracle Solaris 11.1 システムパッケージが含まれている Oracle Solaris 11 インストールサービスを使用した i386 AI クライアントのインストールでは、インストールは開始しますが、リリース内の非互換性のために PlanCreationException エラーで失敗します。次のエラーメッセージが表示されます。

```
Reason: Installed version in root image is too old for origin dependency
```

SPARC AI クライアントのインストールでは、インストールは失敗しませんが、Oracle Solaris 11 ではなく Oracle Solaris 11.1 がインストールされます。

注 - Oracle Solaris 11 インストールサービスからの Oracle Solaris 11.1 のインストールは、サポートされている操作ではありません。

回避方法: Oracle Solaris 11 の AI インストールサービスが、指定されたパブリッシャーのリポジトリで最新バージョンの Oracle Solaris 11 をインストールし続けるようにするには、次の手順を実行します。

1. 変更するマニフェストを決めます。

```
$ installadm list -n svcname -m
```

例:

```
$ installadm list -n default-i386 -m
```

2. そのマニフェストをファイルにエクスポートします。

```
$ pfexec installadm export -n svcname \  
-m manifest-name -o /path-to-save-manifest
```

例:

```
$ pfexec installadm export -n default-i386 \  
-m orig_default -o /home/me/orig_default.xml
```

3. 保存されたマニフェスト内の `<name>pkg:/entire@latest</name>` 行を、Oracle Solaris 11 リリースを指定するように変更します。

次の例は、参照されるリポジトリで利用できる最新バージョンの Oracle Solaris 11 リリースを指定しています。

```
<name>pkg:/entire@0.5.11,5.11-0.175.0</name>
```

バージョン文字列 `0.5.11,5.11-0.175.0` は Oracle Solaris 11 リリースを示しています。バージョン文字列 `0.5.11,5.11-0.175.1` は Oracle Solaris 11.1 リリースを示しています。

特定バージョンの Oracle Solaris 11 リリースをインストールするには、バージョン文字列をさらに詳細にします。次の例では、オリジナルの Oracle Solaris 11 11/11 リリースを使用しています。

```
<name>pkg:/entire@0.5.11,5.11-0.175.0.0.0.2.0</name>
```

4. 保存されたマニフェスト内のパブリッシャー起点の値を取得します。

次の例は、デフォルトの AI マニフェストからの値です。

```
<origin name="http://pkg.oracle.com/solaris/release"/>
```

5. インストールするバージョンが、参照されるリポジトリで利用できることを確認します。

```
$ pkg list -afvg http://pkg.oracle.com/solaris/release entire@0.5.11,5.11-0.175.0
```

6. サービス内のマニフェストを更新します。

```
$ pfexec installadm update-manifest -n svcname \  
-m manifest-name -f /path-to-save-manifest
```

例:

```
$ pfexec installadm update-manifest -n default-i386 \  
-m orig_default -f /home/me/orig_default.xml
```

SPARC:T シリーズサーバーへの Oracle Solaris のインストール中の FMD エラー (16081077)

SPARC T4 サーバーへの Oracle Solaris 11.1 のインストール中に、次の警告がコンソールに表示される場合があります。

```
usbcm0: object not found
```


この警告は致命的ではなく、システムの通常の動作には影響しません。

回避方法: 次の手順を実行します。

1. 障害管理リソース識別子 (FMRI) を特定します。

```
# fmadm faulty
```

2. 障害および障害管理 (FM) ログファイルをクリアーします。

```
# fmadm acquit <fmri>
```

```
# fmadm flush <fmri>
```

詳細は、『Oracle Solaris の管理: 一般的なタスク』ガイドの「障害または欠陥の修復」の章を参照してください。

zoneadm install コマンドにディレクトリを渡すと、そのツリーの下にある重複した名前を持つプロファイルが削除される (7093399)

zoneadm install コマンドの `-c` オプションでは、ディレクトリをパラメータとして指定できます。このディレクトリには、システム構成プロファイルが格納されたサブディレクトリを含めることができます。

このディレクトリの構造はフラット化されるため、ディレクトリ構造内に同じ名前のファイルが存在していると、それらのファイルの 1 つだけがインストール対象のゾーンにコピーされます。

たとえば、次のディレクトリツリーがあるとします。

```
directory-name/profiles1/sc_profile.xml
directory-name/profiles2/sc_profile.xml
directory-name/profiles3/sc_profile.xml
```

このとき、次の zoneadm install コマンドを実行するとします。

```
# zoneadm -z zone install -c directory-name
```

ユーザーが次の各コマンドを順番に発行したかのように、ディレクトリ構造内のファイルが新しいゾーンにコピーされます。

```
# cp directory-name/profiles1/sc_profile.xml \
    zoneroot/etc/svc/profile/site/sc_profile.xml
# cp directory-name/profiles2/sc_profile.xml \
    zoneroot/etc/svc/profile/site/sc_profile.xml
# cp directory-name/profiles3/sc_profile.xml \
    zoneroot/etc/svc/profile/site/sc_profile.xml
```

結果として、後続の各コピーによって以前のコピーが上書きされ、1つのファイルのみが残されます。したがって、インストール後にシステムが正しく構成されません。

回避方法: プロファイルのコピー時にプロファイルが互いに上書きし合わないよう
に、各プロファイルの名前が、ディレクトリ構造内でのそのプロファイルの位置に
かわらず一意であることを確認します。たとえば、次のディレクトリ構造がある
とします。

```
directory-name/profiles1/sc_profile_a.xml  
directory-name/profiles2/sc_profile_b.xml  
directory-name/profiles3/sc_profile_c.xml
```

zonadm コマンドを実行すると、次のようにファイルがゾーンにコピーされます。

```
zonerooot/etc/svc/profile/site/sc_profile_a.xml  
zonerooot/etc/svc/profile/site/sc_profile_b.xml  
zonerooot/etc/svc/profile/site/sc_profile_c.xml
```

自動インストーラの構成プロファイルに Web サーバーからオープンにアクセスできる (7097115)

自動インストーラサーバーがクライアントをインストールするために提供する構成
プロファイルに、Web サーバーからネットワーク経由でオープンにアクセスできま
す。そのため、その構成プロファイルの一部として指定されている暗号化されたパ
スワードはセキュアではありません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- IP フィルタ機能を使用します。これは、自動インストーラの Web サーバーポート
へのアクセスを特定のネットワークまたはクライアントのみに制限する場合に役
立ちます。

IP フィルタ機能の詳細は、『[Oracle Solaris 11 セキュリティガイドライ
ン](#)』の「[パケットフィルタリング](#)」を参照してください。

- システムをインストールしたあとの最初のブート時にログインし、自動インス
トローラを使用することによって構成されたパスワードを変更します。セキュリ
ティを確保するには、システムをシングルユーザーモードでブートします。
- SPARC ベースのシステムでは、boot コマンドに -s オプションを追加します。
- x86 システムでは、GRUB メニューを対話式で編集し、kernel\$ コマンドに -s オプ
ションを追加します。

aimanifest コマンドを使用して新しい要素を追加する場合、直接の次の要素が見つからないと処理が失敗する (7093788)

自動インストーラマニフェストの変更は、Derived Manifest スクリプトから `aimanifest` コマンドを使用して行います。

`aimanifest` の `add` または `load` サブコマンドを使用して新しい要素またはサブツリーを AI マニフェストに追加する場合、新しい要素またはサブツリーのルートがその兄弟要素間の誤った位置に配置される可能性があります。次のすべての条件を満たす場合、新しい要素またはサブツリーのルートは、兄弟要素のリストの末尾が正しい位置でない場合でも、その位置に追加されます。

- 新しい要素の追加先となる親の下に、ほかの要素が存在している。
- 新しい要素の追加先となる親の下に、同じタグを持つ要素がほかに存在していない。
- 新しい要素に続く要素が1つも存在していない。

結果として、マニフェストの検証が失敗する可能性があります。AI の実行時や `/system/volatile/install_log` ファイル内で、派生マニフェストモジュール (DMM) チェックポイントの失敗として似たようなエラーメッセージが見つかる可能性があります。

```
16:48:04: aimanifest: INFO: command:add,
path:/auto_install/ai_instance/
target/logical/zpool[@name=rpool]/filesystem@name,
value:zones
```

```
16:48:04: aimanifest: INFO: cmd:success,
validation:Fail,
node:/auto_install[1]/ai_instance[1]/
target[1]/logical[1]/zpool[1]/filesystem[1]
```

```
16:48:05 Derived Manifest Module: script completed successfully
```

```
16:48:05 Derived Manifest Module: Manifest header refers to no DTD.
```

```
16:48:05 Derived Manifest Module: Validating against DTD:
/usr/share/install/ai.dtd.1
```

```
16:48:05 Validation against DTD
/usr/share/install/ai.dtd.1] failed
```

```
16:48:05 /system/volatile/manifest.xml:6:0:ERROR:VALID:DTD_CONTENT_MODEL:
Element zpool content does not follow the DTD,
expecting
(vdev* , filesystem* , zvol* , pool_options? , dataset_options? , be?),
got (be filesystem )
```

```
16:48:05 Derived Manifest Module: Final manifest failed XML validation
```

```
16:48:05 Error occurred during execution of 'derived-manifest' checkpoint.
```

```
16:48:05 Aborting: Internal error in InstallEngine
```

```
ERROR: an exception occurred.
```

```
Derived Manifest Module: Final manifest failed XML validation
```

回避方法: AI マニフェストを異なる順序で、あるいは一連の異なる `add` または `load` サブコマンドを使用して構築することにより、新しい要素またはサブツリーが正しい順番で追加されるようにします。この順番は、`/usr/share/install` ディレクトリ内の DTD ファイルによって決まります。AI マニフェストの検証時には次の DTD ファイルが使用されます。

- `ai.dtd.1`
- `target.dtd.1`
- `boot_modes.dtd.1`
- `software.dtd.1`

ミラー要素を追加する前にすべての起点要素を追加します。たとえば、パブリッシャーの起点要素とミラー要素を設定する場合に、`software.dtd.1` ファイルに含まれる次の行は、ミラー要素が起点要素のあとに来る必要があることを示しています。

```
<!ELEMENT publisher (origin+, mirror*)>
```

デュアルパスのブートディスクを使用すると、自動インストーラによるターゲットディスクのマッチングが失敗する (7079889)

デュアルパスの FC ブートディスクに Oracle Solaris OS をインストールすると、次のエラーでインストールが失敗します。

```
2011-08-16 18:41:38,434 InstallationLogger.target-selection DEBUG
```

```
Traceback (most recent call last):
```

```
File "/usr/lib/python2.6/vendor-packages/solaris_install/automatic_install/checkpoints/target_selection.py", line 3419, in execute
self.select_targets(from_manifest, discovered, dry_run)
```

```
2011-08-16 18:41:38,642 InstallationLogger INFO
```

```
Automated Installation Failed
```

```
2011-08-16 18:41:38,693 InstallationLogger INFO
```

```
Please see logs for more information
```

```
2011-08-16 18:41:38,743 InstallationLogger DEBUG
```

```
Shutting down Progress Handler
```

回避方法: デュアルパス FC ケーブルのいずれか 1 つを切り離します。

AI サーバーでの複数の AI サービス名の競合 (7042544)

複数のネットワークにサービスを提供するように構成された AI サーバー上で、mdns デーモンから、AI サービス名の同一のインスタンスが登録されているという警告が発行される可能性があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
mDNSResponder: [ID 702911 daemon.error]
Client application registered 2 identical instances of service some-service._
OSInstall._tcp.local. port 5555.
```

```
mDNSResponder: [ID 702911 daemon.error]
Excessive name conflicts (10) for some-service._
OSInstall._tcp.local. (SRV); rate limiting in effect
```

注 - AI クライアントは引き続き、インストールに必要な情報を取得できます。

回避方法: 複数の AI サービス名の競合を回避するには、svc:/system/install/server:default SMF サービスの exclusion または inclusion プロパティを設定します。

次の例では、システム上で構成されたすべてのネットワークが含まれるように all_services/exclude_networks および all_services/networks プロパティを設定する方法を示します。

```
# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
setprop all_services/exclude_networks = false

# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
delprop all_services/networks #1.#1.#1.#1/#1

# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
delprop all_services/networks #2.#2.#2.#2/#2

...

# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
addprop all_services/networks 0.0.0.0/0

# svcadm refresh svc:/system/install/server:default
# svcadm restart svc:/system/install/server:default
```

#1.#1.#1.#1/#1 と #2.#2.#2.#2/#2 は、構成されているネットワークインタフェースの IP アドレスです。

mDNS の詳細については、『Oracle Solaris 11.1 でのネームサービスおよびディレクトリサービスの作業』の「マルチキャスト DNS の管理」を参照してください。

テキストインストーラが、別の言語が選択されていても英語で表示される (7095437)

Web ベースのリモートキーボード、ビデオモニター、マウス、VirtualBox コンソールなどの、物理コンソールと同等のコンソール上でテキストインストーラを使用するときは、インストールメディアからのブート中に別の言語を選択した場合でも、インストーラはテキストを英語で表示します。インストーラのテキストが英語で表示されるのは、非 ASCII 文字が文字化けして表示されるのを防ぐためです。

テキストインストーラは、シリアルコンソールと同等のコンソール(たとえば、SSH または telnet に基づいたサービスコンソール) 上でのみローカライズされたテキストを表示します。

回避方法: ありません。

テキストインストーラでは、既存の Solaris2 パーティション内の別のスライスに Oracle Solaris をインストールすることはできない (7091267)

テキストインストーラでは、既存の Solaris2 パーティション内のスライスに Oracle Solaris をインストールすることはできません。この問題は、その同じパーティション内の別の単一スライス上または一連のスライス上のデータを保持することを選択した場合のみ発生します。

テキストインストーラの「fdisk パーティション内のスライスを選択します」画面では、Solaris2 パーティション内の 1 つの既存スライスが rpool タイプとして表示されます。F5 キーを使用して、未使用スライスのタイプを rpool に変更することはできません。

既存の rpool スライス上のデータを破棄するのでないかぎり、インストーラを終了する必要があります。この問題は、システム内のほかの変更には影響を与えません。

回避方法: テキストインストーラを使用するには、別のディスクに Oracle Solaris をインストールする必要があります。既存の Solaris2 パーティション内の空き容量のある別のスライスにインストールするには、カスタマイズされたマニフェストとともに自動インストーラ (AI) を使用します。カスタマイズされた AI マニフェストでは、インストールに使用するスライスを指定します。

たとえば、既存の Solaris2 パーティションのスライス 7 上の s11-rpool ルートプールに Oracle Solaris をインストールするには、カスタマイズされた AI マニフェストの targets セクションで、次のように指定します。

```
<target>
  <disk>
    <disk_name name="c3d0" name_type="ctd"/>
```

```

    <partition action="use_existing_solaris2">
      <slice name="7" in_zpool="s11-rpool">
        <size val="6144mb"/>
      </slice>
    </partition>
  </disk>
</logical>
  <zpool name="s11-rpool" is_root="true">
    <filesystem name="export" mountpoint="/export"/>
    <filesystem name="export/home"/>
    <be name="solaris"/>
  </zpool>
</logical>
</target>

```

sysconfig およびテキストインストーラアプリケーションがタイムゾーン画面から予期しないかたちで終了する (7026383)

次のいずれかの操作を実行すると、sysconfig とテキストインストーラアプリケーションがタイムゾーン画面から予期せず終了することがあります。

- Ctrl キーを押しながら L キーを押します。
- F9 キーを押し、「取消し」ボタンを選択します。

この問題は、次のいずれかのゾーン地域を選択した場合のみ発生します。

- アフリカ
- アメリカ
- アジア
- ヨーロッパ
- 太平洋

注-アプリケーションが終了する前にユーザーが行なった選択は、一切保存されません。

回避方法: この動作を避けるには、これらのアプリケーションをタイムゾーン画面から終了しようとしないうでください。次の回避方法を使用してください。

- テキストインストーラを実行していた場合は、インストールのメインメニューに自動的に戻ります。このメインメニューから、「Oracle Solaris をインストールする」オプションを選択してテキストインストーラを再起動します。
- sysconfig アプリケーションを実行していた場合は、次を行います。
 1. 空のパスワードを使用して root としてログインします。
 2. リブートし、対話式の構成プロセスを初めから再開します。

「自分の名前」フィールドに **ASCII** 以外の文字が指定されている場合、インストールに失敗する (**7108040**)

対話型インストーラまたは `sysconfig` ユーティリティを使用して Oracle Solaris をインストールする場合、「ユーザー」画面の「自分の名前」フィールドに ASCII 以外の文字が指定されていると、インストールに失敗する可能性があります。

「ユーザー」画面に ASCII 以外の文字を指定したあとに続く手順では、インストールが失敗したり、文字が正しく表示されなかったりする可能性があります。

回避方法: 「自分の名前」フィールドには ASCII 文字のみを使用します。

x86: 拡張ファームウェアインタフェースが有効な場合に **Xorg VESA** ドライバが **Oracle VM VirtualBox** で機能しない (**7157554**)

拡張ファームウェアインタフェース (EFI) が有効な場合に Xorg VESA ドライバが Oracle VM VirtualBox で機能しません (Live Media が Xorg にブートしないことを意味します)。そのため、GUI のインストールができません。

回避方法: 次の手順を実行します。

1. テキストインストーラまたは自動インストーラ (AI) を使用して Oracle Solaris 11.1 をインストールします。
2. `pkg` コマンドを使用して `solaris-desktop` グループパッケージをインストールします。
3. VirtualBox Xorg ネイティブドライバが含まれている VirtualBox ゲストツールをインストールします。

`solaris-desktop` グループパッケージのインストール手順については、『[Oracle Solaris 11.1 システムのインストール](#)』の「[Live Media インストール後のソフトウェアの追加](#)」を参照してください。

nge ドライバを含む **x2100** プラットフォームでネットワークベースの自動インストーラが失敗する (**6999502**)

`nge` ドライバを含む `x2100` プラットフォームでネットワークベースの自動インストーラを使用して Oracle Solaris をインストールすると、しばらくして次のエラーメッセージが表示される可能性があります。


```
kernel$ /s11-173-x86/platform/i86pc/kernel/$ISADIR/unix -B install_media=http://
$serverIP:5555//install/images/s11-x86,install_service=s11-173-x86,install_svc_address=
$serverIP:5555
loading '/s11-173-x86/platform/i86pc/kernel/$ISADIR/unix -B install_media=http://
$serverIP:5555//install/images/s11-x86,install_service=s11-173-x86,install_svc_address=
$serverIP:5555'
module$ /s11-173-x86/platform/i86pc/$ISADIR/boot-archive
loading '/s11-173-x86/platform/i86pc/$ISADIR/boot-archive' ...
```

Error 20: Multiboot kernel must be loaded before modules

Press any key to continue...

この問題は、BIOS バージョン 1.1.1 以降を使用する PXE インストールで、x2100 BIOS を nge ドライバとともに使用したときに発生します。

回避方法: nge ドライバを含む x2100 プラットフォームに Oracle Solaris をインストールするには、次のいずれかの回避方法を選択します。

- 次のいずれかの方法を使用して Oracle Solaris をインストールします。
 - 自動インストーラ
 - Live Media
 - テキストインストーラ
- nge ドライバの代わりに bge ドライバを使用します。
- BIOS のバージョンをバージョン 1.0.9 に変更します。

x86: 64 ビット: Oracle の Sun Fire x4170m3 および x4270m3 サーバーで DVD のインストールに失敗する可能性がある (7185764)

Oracle の Sun Fire x4170m3 および x4270m3 サーバーで Oracle Solaris をインストールすると、bad marshal data エラーでインストールが断続的にクラッシュする可能性があります。この障害の原因は、DVD によってマウントされたイメージ内に破壊された solaris.zlib ファイルがあるためです。

破壊されたファイルのために、マウントされた ISO イメージ内の lofi ファイルデバイスのファイルのいくつかで読み取り操作が失敗します。インストール中にシステムによっていくつかのエラーメッセージが表示されます。

回避方法: 次の手順を実行して Virtualization Technology for Directed-IO (VT-d) を無効にします。

1. サーバーを再起動するか、サーバーの電源を投入します。
2. プロンプトが表示されたら F2 キーを押して、BIOS 設定ユーティリティーに入ります。

3. BIOS の「IO」メニュー画面で、「IO」>「IO Virtualization」を選択し、「VT-d」設定を無効にします。

Oracle Solaris のインストール後にその他の EHCI コントローラの「VT-d」を有効にするには、次の手順を実行します。

1. 次の行を `/kernel/drv/ehci.conf` ファイルに追加します。

```
iommu-dvma-mode="unity";
```
2. システムをリブートします。
3. BIOS 設定ユーティリティーで「VT-d」を有効にします。

ハードウェア関連の問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 のハードウェア関連の問題について説明します。

x86: 初期のカーネルブートフェーズ中に Dell 製の一部のデスクトップが UEFI モードでハードハングする (7150035)

Dell 製のいくつかのデスクトップモデル (Precision T1600 および Optiplex 790 モデルなど) が、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) モードでブートされると、ブート時にハードハングします。この問題は、Dell 製ファームウェアの既知の問題です。

回避方法: インストールを完了するには、`-B uefirt_disable=1` ブート属性を指定してシステムをブートします。

- この属性を 1 回かぎりのブートに対して指定するには、ブート時に GRUB メニューを編集します。
- この変更を永続的なものにするには、`bootadm` コマンドを `change-entry` サブコマンドとともに使用します。

```
# bootadm change-entry -i entry-number kargs='-B uefirt_disable=1'
```

インストール後に、インストーラが作成したブート環境で `bootadm change-entry` コマンドを再度実行する必要があります。



注意 - 新しいブート環境を作成する前に、必ず `bootadm change-entry` コマンドを実行してすべての新しいブート環境が同じカーネル引数文字列を継承するようにしてください。それ以外の場合は、作成するすべてのブートエントリを手動で変更する必要があります。`bootadm` コマンドを使用して特定のブートエントリに変更を加える方法については、『Oracle Solaris 11.1 システムのブートおよびシャットダウン』の「GRUB メニューの指定したブートエントリの属性を設定する方法」を参照してください。

注 - これらの回避方法ではUEFI実行時サービスを無効にしますが、これはOracle Solarisがシステムのデフォルトブートデバイスを設定できないことを意味します。結果として、インストール後にシステムのデフォルトブートデバイスを手動で設定することが必要になる可能性があります。それを行うには、システムのファームウェア設定ユーティリティ (UEFI ブートマネージャーなど) を使用します。

更新の問題

この章では、Oracle Solaris 11.1 への更新中に発生する可能性のある問題について説明します。

Oracle Solaris 11.1 への更新時の問題

Oracle Solaris 11.1 への更新時に、次の問題が発生する可能性があります。

更新後に、**syslog** が **/etc/ail/aliases.db** 別名データベースが古いと報告する (7096745)

ローカル別名 (`/etc/mail/aliases`) が追加されたことのないシステム上で、以前の Oracle Solaris リリースから Oracle Solaris 11.1 に更新したあと、次のログメッセージが表示されることがあります。

```
hostname sendmail[<pid>]:  
[ID 702911 mail.info] alias database /etc/mail/aliases.db out of date
```

このメッセージはシステムに影響を与えません。

回避方法: root 特権で `/usr/sbin/newaliases` を実行します。

Oracle Solaris 11 から Oracle Solaris 11.1 への更新時に /var/crash の内容がディレクトリに保持される (7174490)

Oracle Solaris 11 から Oracle Solaris 11.1 に更新するときに、/var/crash ディレクトリが空でない場合、更新中に pkg ユーティリティーによってそのディレクトリの内容が一時ディレクトリに移動されることで、それらが保持されます。次のメッセージが表示されます。

```
The following unexpected or editable files and directories were salvaged while executing the requested package operation; they have been moved to the displayed location in the image:
```

```
var/crash -> /tmp/tmpkh1zTy/var/pkg/lost+found/var/crash-20120906T161348Z
```

ここで、`crash-20120906T161348Z` はタイムスタンプを含むディレクトリの名前です。そのディレクトリの名前がアップグレードの時間によって変わることにご注意してください。

回避方法: それらのファイルはシステムからのクラッシュダンプであるため、それらがなくともシステムは正しく動作します。それらのファイルを保持する場合は、宛先ディレクトリの内容を確認し、必要なファイルを /var/crash ディレクトリにコピーして戻します。

64 ビット:iscsiadm ユーティリティーが発見アドレスを削除できない (7184125)

ユーザーが Oracle Solaris 11.1 にアップグレードするときに、iSCSI イニシエータに `discovery-address` が含まれている場合、アップグレード後にそのユーザーは古い `discovery-address` を削除できません。次のエラーメッセージが表示されます。

```
iscsiadm: unexpected OS error  
iscsiadm: Unable to complete operation
```

回避方法: 前のブート環境への最初のリポート前に、次のコマンドを使用して `discovery-address` を削除します。

```
# iscsiadm remove discovery-address IP-address[:port-number]
```

アップグレード後に新しい `discovery-address` を追加できます。

Fetchmail がインストールされている場合、Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12 またはそれ以降から Oracle Solaris 11.1 への更新に失敗する (7200467)

Fetchmail がインストールされている場合は、Oracle Solaris 11 Support Repository Update (SRU) バージョン 12 またはそれ以降から Oracle Solaris 11.1 に更新できません。

Oracle Solaris 11.1 は Fetchmail バージョン 6.3.21 をサポートしていますが、Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12 以降は Fetchmail バージョン 6.3.22 をサポートしていません。SRU バージョン 12 でサポートされている Fetchmail のバージョンの方が高いため、更新プロセスは失敗します。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- Fetchmail をアンインストールしてから、システムを SRU バージョン 12 またはそれ以降から Oracle Solaris 11.1 に更新します。更新プロセスが完了したあとで、システムをリブートし、Fetchmail 6.3.21 をインストールします。
- Fetchmail がインストールされている大域ゾーンとローカルゾーンで `-facet.version-lock.mail/fetchmail` オプションを `false` に設定します。

```
# pkg change-facet facet.version-lock.mail/fetchmail=false
```
- Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12.4 以降から Oracle Solaris 11.1 SRU バージョン 1.4 以降のバージョンにアップグレードします。

BIND がインストールされている場合、Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12 またはそれ以降から Oracle Solaris 11.1 への更新に失敗する (7203326)

BIND がインストールされている場合は、Oracle Solaris 11 Support Repository Update (SRU) バージョン 12 またはそれ以降から Oracle Solaris 11.1 に更新できません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- `pkg change-facet` コマンドを使用して `facet.version-lock.service/network/dns/bind` オプションを `false` に設定します。

```
# pkg change-facet facet.version-lock.service/network/dns/bind=false  
# pkg change-facet facet.version-lock.network/dns/bind=false
```
- Oracle Solaris 11 SRU バージョン 12.4 以降から Oracle Solaris 11.1 SRU バージョン 1.4 以降のバージョンにアップグレードします。

SPARC: ゾーンを含むシステムで Oracle Solaris 11 SRU 10 からの更新に失敗する (7192769)

ゾーンを含む SPARC システムで、Oracle Solaris 11 SRU 10 を実行している場合またはリリースリポジトリからの更新パッケージを使用している場合に Oracle Solaris 11.1 への更新が失敗します。次のエラーメッセージが表示されます。

```
pkg sync-linked: No solution was found to satisfy constraints
```

回避方法: ゾーンにログインし、次のコマンドを使用して `ldomsmanager` パッケージを削除します。

```
# pkg uninstall ldomsmanager
```


実行時に関する注意事項

この章では、Oracle Solaris 11.1 の実行中に発生する次の既知の問題について説明します。

- 41 ページの「ファームウェアに関する問題」
- 44 ページの「システム構成に関する問題」
- 46 ページの「ファイルシステムに関する問題」
- 48 ページの「システム管理に関する問題」
- 54 ページの「ネットワーク接続に関する注意事項」
- 56 ページの「デスクトップに関する問題」
- 58 ページの「グラフィックスと画像処理に関する問題」
- 60 ページの「パフォーマンスに関する問題」
- 60 ページの「ハードウェアに関する問題」
- 62 ページの「ローカリゼーションに関する注意事項」

ファームウェアに関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのファームウェアに関する問題について説明します。

x86: マスターブートレコードの EFI_PMBR エントリがアクティブでない場合に BIOS ファームウェアを含む一部のシステムがブートしない (7174841)

マスターブートレコードの EFI_PMBR エントリ (唯一のパーティション) がアクティブでない場合に BIOS ファームウェアを含む一部のシステムがブートしません。Oracle Solaris 11.1 のインストール後、システムがブートしません。次のメッセージが表示されます。

No Active Partition Found

考えられる原因 **1**: ブートディスクが GUID パーティションテーブル (GPT) 分割スキームを使用してパーティション化されているため、システムファームウェアがそのブートディスクを正しく処理しません。

回避方法 **1**: fdisk プログラムを呼び出してから、ブートディスク上で Protective Extensible Firmware Interface (EFI) パーティションをアクティブ化します。

考えられる原因 **2**: システムが最初に UEFI モードでインストールされましたが、レガシー (BIOS) モードでリブートされました。

回避方法 **2**: ファームウェア設定オプションを変更して (「ブートモード」や類似のオプションを選択するなどして)、システムをレガシーモードでインストールします。

SPARC: GPT ラベル付きディスクのサポート

GPT ラベル付きディスクのサポートが SPARC ベースのシステムで利用可能です。次の表で、SPARC プラットフォームでサポートされるファームウェアについて説明します。

SPARC プラットフォーム	ファームウェア
T5	少なくともバージョン 9.1
M5	少なくともバージョン 9.1
T4	少なくともバージョン 8.4

SPARC T4、T5、または M5 システムに古いファームウェアが搭載されている場合、次の手順を実行して、My Oracle Support から更新済みのファームウェアをダウンロードします。

1. [My Oracle Support](#) にサインインします。
2. 「パッチと更新版」タブをクリックします。
3. 「パッチ検索」ボックスで、「製品またはファミリー (拡張)」検索オプションを選択します。
4. 「製品は_です」フィールドに、製品名の一部を入力して一致のリストを表示し、製品名を選択します。
5. 「リリースは_です」ドロップダウンメニューから 1 つ以上のリリースを選択します。
6. 「検索」ボタンをクリックして、パッチとして一覧表示されている入手可能なダウンロードのリストを表示します。
7. ダウンロードするパッチ名を選択します。

ダウンロードページが表示されます。

8. 「ダウンロード」をクリックします。

注-パッチをダウンロードするアクセス権を持っていない場合は、MOSで使用できるパッチおよび更新の権限のしくみに関するナレッジ記事を参照してください。

詳細は、『Oracle Solaris 11.1 の管理: ZFS ファイルシステム』の「EFI (GPT) ラベル付きディスクのブートサポート」を参照してください。

x86: ISO イメージからの UEFI モードでのブートが非常に遅い

ISO イメージからの UEFI モードでのブートに非常に時間がかかります。これは Oracle VM VirtualBox ファームウェアの既知の問題です。

回避方法: ありません。

x86: 4G バイトの Emulex および Qlogic 製 FC HBA カードを搭載した 2T バイトを超える LUN/ディスクを含むディスクで Oracle Solaris がブートしない (7187083、7188696)

x86 システムで、4G バイトの Emulex および Qlogic 製 FC HBA カードを搭載した 2T バイトを超える LUN/ディスクを含むディスクで Oracle Solaris がブートしません。

Emulex 製 FC HBA カードでは次のエラーメッセージが表示されます。

```
error: no such device: 07528c2afbec7b00.  
Entering rescue mode...  
grub rescue> ls  
(hd0) (hd0,gpt9) (hd0,gpt2) (hd0,gpt1) (hd1)  
grub rescue>
```

Qlogic 製 FC HBA カードを使用した OS のブート中にはエラーメッセージが表示されません。2T バイトを超える LUN を含むディスクはブートローダーで見えないため、ブートは暗黙のうちに失敗します。

回避方法: システムのブートボリュームが 2T バイト未満になるようにします。

システム構成に関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのシステム構成に関する問題について説明します。

カスタム **SMF** サイトプロファイルをサブディレクトリ内に配置する必要がある (**7074277**)

Oracle Solaris インスタンスを構成解除すると、`/etc/svc/profile/site` ディレクトリ内のカスタム SMF サイトプロファイルが削除されます。

回避方法: 構成解除中は、保持するカスタムサイトプロファイルを `/etc/svc/profile/site` ディレクトリのサブディレクトリ内に配置しておきます。

-c オプション付きの **sysconfig configure** コマンドでディレクトリ構造がフラット化される (**7094123**)

`sysconfig configure` コマンドには、システムを再構成するために、ディレクトリをパラメータとして指定可能な `-c` オプションが用意されています。このディレクトリには、システム構成プロファイルが格納されたサブディレクトリを含めることができます。

ディレクトリ構造はフラット化されるため、ディレクトリツリー内のファイルの名前が同じであると、それらのファイルのいずれか1つを使用してシステムの再構成が行われます。結果として、プロファイルのいずれか1つを使用してシステムの再構成が部分的に行われます。たとえば、次のディレクトリ構造があるとします。

```
directory-name/profiles1/sc_profile.xml  
directory-name/profiles2/sc_profile.xml  
directory-name/profiles3/sc_profile.xml
```

`sysconfig` コマンドを `-c` オプションを指定して実行すると、プロファイルのいずれか1つだけを使用してシステムの再構成が部分的に行われます。

```
# sysconfig configure -c directory-name
```

回避方法: 各プロファイルが、ディレクトリツリー内でのそのプロファイルの位置にかかわらず一意の名前を持つことを確認します。例:

```
directory-name/profiles1/sc_profile_a.xml  
directory-name/profiles2/sc_profile_b.xml  
directory-name/profiles3/sc_profile_c.xml
```

SPARC: システムが iSCSI ストレージレイ上の iSCSI LUN のブートに失敗する (7148479)

Oracle Solaris が iSCSI ストレージレイ上の iSCSI LUN のブートに失敗します。次のエラーメッセージが表示されます。

```
OpenBoot 4.33.5.a, 4096 MB memory installed, Serial #10027306.  
Ethernet address 0:b:5d:e2:1:2a, Host ID: 8099012a.
```

```
Rebooting with command: boot  
100 Mbps full duplex Link up  
Boot device: net:host-ip=10.129.158.53,  
iscsi-target-ip=10.129.158.87,  
iscsi-target-name=iqn.2002-03.com.pillardata:axiom.ssn.a002880bjb  
File and args: kmdb  
100 Mbps full duplex Link up  
Can't read disk label.  
Can't open disk label package  
ERROR: /packages/obp-tftp: Could not open /iscsi-hba/disk
```

```
Evaluating:
```

```
Boot load failed
```

```
{0} ok
```

回避方法: iSCSI ブートパラメータが長すぎる場合は、それらをネットワークブートパラメータとして変更します。

たとえば、Open Boot PROM (OBP) モードで iSCSI ブートを実行するコマンドは次のとおりです。

```
{0} ok boot net:'iSCSI boot parameters'
```

ここで、`net` は `/pci@780/pci@0/pci@1/network@0` のような値を表すデバイス別名です。

そのため、iSCSI ブート文字列は非常に長くなり、すぐに 255 バイトの制限に達する可能性があります。

```
/pci@780/pci@0/pci@1/network@0:host-ip=10.129.158.53,  
subnet-mask=255.255.255.0,router-ip=10.129.158.1,iscsi-target-ip=10.129.158.87,  
iscsi-target-name=iqn.2002-03.com.pillardata:axiom.ssn.a002880,  
iscsi-initiator-id=iqn.1986-03.com.sun:01:002128bd2fa0.
```

iSCSI LUN でシステムをブートするには、iSCSI ブートパラメータをネットワークブートパラメータとして変更します。

```
{0} ok setenv network-boot-arguments host-ip=client-IP,
```

```
router-ip=router-ip,subnet-mask=mask-value,iscsi-target-ip=Target-IP,  
iscsi-target-name=iqn.1986-03.com.sun:02:iscsiboot,  
iscsi-initiator-id=iqn.1986-03.com.sun:01:002128bd2fa0,iscsi-lun=0
```

ファイルシステムに関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのファイルシステムに関する問題について説明します。

zfs set/inherit mountpoint が Oracle Solaris 10 ブランドゾーンに関する失敗メッセージを表示する (7195977)

Oracle Solaris 10 ブランドゾーンでは、次のコマンドを使用してデータセットのマウントポイントを継承または設定すると、操作上そのコマンドは成功しますが、エラーメッセージが返されます。

- `zfs inherit mountpoint`
- `zfs set mountpoint`

次のエラーメッセージが表示されます。

```
ERROR: /usr/sbin/zfs inherit mountpoint zonectr0 exited 1
```

回避方法: このエラーメッセージは無視してください。コマンドは正しく実行されています。

ZFS 関連のパニックのせいでシステムが継続的にリポートする (7191375)

ZFS ストレージプールに破壊された領域マップエントリが含まれているせいでシステムが継続的にリポートする場合は、根本的な原因を解析するために、システムクラッシュダンプを Oracle サポートに送ってください。

初期またはそれに続くパニック文字列は次のように始まります。

```
zfs: freeing free segment  
zfs: allocating allocated segment
```

問題のあるプールをインポートしてマウントしようとする、システムパニックが発生します。

回避方法: 問題のあるプールを特定し、そのプールを読み取り専用モードでインポートします。

1. システムを停止し、`milestone=none` オプションを使用してシステムをブートします。

SPARC の場合は、次のコマンドを入力します。

```
ok boot -m milestone=none
```

x86 の場合は、milestone オプションを適切な GRUB エントリに追加します。

```
-m milestone=none
```

- ただちに、zpool.cache ファイルの名前を変更して、システムがルート以外のプールをインポートしないようにします。

```
# mv /etc/zfs/zpool.cache /etc/zfs/zpool.hold
```

プール情報がロードされる ZFS コマンドは一切使用しないでください。

- システムをリブートします。

```
# reboot
```

- 各プールを一度に1つずつインポートして、問題のプールを特定します。
- 問題のプールを読み取り専用モードでインポートします。

```
# zpool import -o readonly=on poolname
```

Oracle Solaris システムで新しい **Advanced Format** のディスクドライブに置き換えるか、それを使用すると、問題が発生する

ディスク製造元では、Advanced Format (AF) ディスクとも呼ばれる、大容量ディスクを提供するようになりました。AF ディスクとは、物理ブロックサイズが 512 バイトを超えるハードディスクドライブです。AF ディスクは 512 バイトを超える (通常は 4096 バイトの) ブロックサイズを使用しますが、それらのサイズは次のように変わることがあります。

- 4K バイトネイティブディスク (4kn) – 4K バイトの物理および論理ブロックサイズを使用します
- 512 バイトエミレーション (512e) – 4K バイトの物理ブロックサイズを使用しますが、512 バイトの論理ブロックサイズを報告します

Oracle Solaris 11.1 システムで新しいデバイスまたは置換用デバイスとして AF ディスクの購入を検討している場合は、次の問題を確認してください。

Advanced Format 512e ディスクドライブの特定モデルにはパワーセーフ機能がないため、データ損失が生じる可能性がある

特定の 512e ディスクドライブにパワーセーフ機能が備わっていないため、読み込み、修正、書き込み (rmw) 操作中に電源障害が発生すると、データが失われる可能性があります。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- 512e デバイスにパワーセーフ機能が備わっていることをディスク製造元に確認します。
そのようなドライブでパワーセーフの確認が一貫して見られるわけではありませんが、それらは SATA ドライブである傾向があります。それらが AF ドライブであるという表示は、必ずしもそれらが 512 エミュレーション (512e) をサポートしていることを意味するわけではありません。
- Oracle Solaris システムではこれらのドライブを使用しないでください。

SPARC システムでの 4kn ディスクのインストールおよびブートサポートには、特定の PROM バージョンが必要である

SPARC システムの 4kn ディスクでの Oracle Solaris 11.1 のインストールとブートには、ボリューム構成テーブル (VTOC) ラベルと PROM バージョン 4.34.0 が必要です。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- 4kn ディスクから Oracle Solaris 11.1 をインストールしてブートする場合は、VTOC ラベルを適用し、システムがこのバージョンで動作していることを確認します。

例:

```
# prtconf -pv | grep OBP
version: 'OBP 4.34.0 ...'
```

- Oracle サポートにファームウェアのアップグレードをリクエストします。

Oracle Solaris 11.1 で Advanced Format のディスクを使用する方法についての詳細は、『[Oracle Solaris 11.1 の管理: デバイスとファイルシステム](#)』を参照してください。

システム管理に関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 でのシステム管理に関する問題について説明します。

HCA DR 操作を成功させるためには RDSv3 のサポートが必要である (7098279)

ATTN ボタンまたは `cfgadm` コマンドの使用時に、InfiniBand ホストチャネルアダプタの動的再構成 (DR) 操作が失敗することがあります。

IB ネットワークを構成解除したあとで、ATTN ボタンまたは `cfgadm` コマンドを使用して Infiniband Network Express Module の DR を行うと、次のエラーメッセージが表示されることがあります。


```
Seen on console of system:
WARNING: ... failed to detach driver ...
WARNING: ... failed to unconfigure ?
```

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- RDSv3 ドライバを削除して、システムをリブートします。

```
# rem_drv rdsv3
# reboot
```

RDSv3 ドライバを戻すには、次のコマンドを入力します。

```
# add_drv rdsv3
# reboot
```

- RDSv3 パッケージを削除して、システムをリブートします。

```
# pkg uninstall system/io/infiniband/reliable-datagram-sockets-v3
# reboot
```

システムは別のブート環境でブートすることがあります。

RDSv3 パッケージを復元するには (pkg リポジトリが使用可能である場合)、次のコマンドを発行します。

```
# pkg install system/io/infiniband/reliable-datagram-sockets-v3
# reboot
```

- 動的に再構成される IB カードの種類に応じて、`cfgadm` コマンドを使用します。IB カードが PCI-EM0 モジュラーオプションに含まれている場合は、次のコマンドを発行します。

```
# cfgadm -c unconfigure PCI-EM0
# cfgadm -c disconnect PCI-EM0
```

IB をシステムに戻すには、次のコマンドを発行します。

```
# cfgadm -c connect PCI-EM0
# cfgadm -c configure PCI-EM0
```

zoneadm attach コマンドが、**-a** および **-n** オプションの使用時にハングアップする可能性がある (7089182)

このリリースでは、`zoneadm attach` コマンドの `-n` または `-a` オプションで、ハイフン (-) 記号を使用して `stdin` 引数を指定できません。

回避方法: `stdin` 引数を使用しないでください。

分割されたマニフェストで `svccfg validate` コマンドが失敗する (7054816)

Oracle Solaris で提供された適切な複数マニフェストサポートにより、`svccfg validate` コマンドはもう、見つからない必須のプロパティグループについて警告しなくなります。ただし、分割されたマニフェストでは `svccfg validate` コマンドが失敗します。

この問題は、マニフェストを提供するインスタンスが、別のマニフェスト内でサービスレベルで定義されたサービスメソッドがないために正しく検証されないときに発生します。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
$ svccfg validate /lib/svc/manifest/system/console-login-vts.xml
Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt6";
Name of missing property group="start"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="start"; pg_pattern type="method"
```

```
Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt6";
Name of missing property group="stop"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="stop"; pg_pattern type="method"
```

```
Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt5";
Name of missing property group="start"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="start"; pg_pattern type="method"
```

```
Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt2";
Name of missing property group="stop"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="stop"; pg_pattern type="method"
```

```
svccfg: Validation failed.
```

この警告は、コンソール上ではなく `manifest-import` サービスログファイル内に表示されます。この警告は致命的ではないため、インスタンスのインポートが妨げられることはありません。インスタンスがインポートされたあと、`svccfg validate` コマンドを使用して、そのインスタンスを手動で正常に検証できます。

回避方法: 分割されたマニフェストで `svccfg validate` コマンドを使用しないでください。

SPARC: SP が縮退モードの場合にシステムのブートが失敗する (6983290)

SPARC T3 および T4 システムでサービスプロセッサ (SP) が縮退モードになっていると、ホストシステムのリブートが失敗する可能性があります。

回避方法: ありません。

OpenMP アプリケーションで散発的な実行時の障害が発生する (7088304)

次のどのシナリオでも、実行時に散発的なセグメント例外またはデータ破壊が発生することがあります。

- OpenMP 指令を使用してアプリケーションが並列化されます
- `-xautopar` オプションを使用して、Oracle Solaris Studio コンパイラによってアプリケーションが自動的に並列化されます
- アプリケーションに入れ子並列領域があります

回避方法: アプリケーションが OpenMP タスク処理 (TASK 指令) を使用しない場合は、`__SUNW_MP_SEQ_OMPTASK` 環境変数を TRUE に設定します。

C シェル (csh) を使用している場合は、次のコマンドを入力します。

```
setenv __SUNW_MP_SEQ_OMPTASK TRUE
```

Korn シェル (ksh) を使用している場合は、次のコマンドを入力します。

```
__SUNW_MP_SEQ_OMPTASK=TRUE
```

32 ビット: YMM および浮動小数点レジスタに対して PCSXREG が EINVAL エラーをトリガーする (7187582)

32 ビットアプリケーションのデバッグ時に、特定のレジスタを設定しようとすると、デバッガでエラーが発生します。

SPARC では、浮動小数点レジスタを設定できません。x86 では、YMM レジスタを設定できません。

次のエラーメッセージが表示されます。

```
mdb: failed to modify %f50 register: libthread_db call failed unexpectedly
```

```
dbx: internal error:  
Cannot set registers --  
PCmd::flush(): write of PCSREG PCSXREG fails -- Invalid argument
```

回避方法: ありません。

同じ volname を持つ 2 つのディスクが存在する場合に対話型インストーラによって間違っただisksが選択されることがある (7195880)

複数のディスクが空白以外の同じ volname (ディスクラベルとも呼ばれる) を持つシステムでは、Live Media とテキストインストーラが間違っただisks情報を表示し、不適切なディスクに OS をインストールする可能性があります。

注- ディスクボリューム名はデフォルトでは空白であり、特権ユーザーが明示的に設定する必要があります。

テキストインストーラでは、ディスクパーティション分割画面に一覧表示されている最初のディスク以外に、一致する volname を持つディスクが選択されると、表示されているパーティションまたはスライスは引き続き最初のディスクに割り当てられます。最初のディスクが、OS のインストールに使用される選択されたディスクになります。

Live Media インストーラでは、最初のディスク以外に、一致する volname を持つディスクを選択すると、同様の動作が行われます。最初のディスクは、ディスクパーティション分割画面で一致する volname を持つ左端のアイコンです。

回避方法: インストーラを実行する前に、システム上の各ディスクの volname が一意または空白であることを確認します。

format コマンドを使用すると、volname を変更または削除できます。詳細は、format(1M) のマニュアルページを参照してください。

作成後に FCoE ポートがオンラインにならない (7191873)

fcadm create-fcoe-port コマンドを使用して FCoE ポートを作成した場合、FCoE ポートのステータスがオンラインではなくオフラインとして表示されます。次のコマンドを使用すると、FCoE ポートのステータスを確認できます。

```
# fcinfo hba-port -e
```

回避方法: FCoE ポートをオンラインにするには、FCoE ポートを作成したあとで次のコマンドを入力します。

```
# ifconfig netX plumb
```

間違った ASR プロパティが指定された場合に asr-notify が保守モードになる (7195227)

Oracle Solaris のインストール時に間違った Auto Service Request (ASR) プロパティを指定すると、asr-notify サービスは asradm ユーティリティーへの登録が成功したあとで保守モードに切り替わります。asradm ユーティリティーは、ASR の登録が成功したあとでインストーラ設定をクリアしません。エラーメッセージは表示されません。手動による登録を行なっても問題は解決しません。

回避方法: 次の手順を実行します。

1. autoreg グループを asr-notify:default サービスから削除します。

```
# svccfg -s asr-notify:default delpg autoreg
```

2. ASR 登録ユーティリティーに登録します。

```
# asradm register
```

3. svcadm コマンドを使用して、asr-notify サービスをリフレッシュ、クリア、および有効にします。

```
# svcadm refresh asr-notify
```

```
# svcadm clear asr-notify
```

```
# svcadm enable asr-notify
```

x86: cfgadm -c configure および hotplug enable コマンドがホットプラグスロットまたは PCIe EM スロットの構成に失敗する (7198763)

cfgadm -c configure および hotplug enable コマンドが x86 プラットフォーム上の PCIe ホットプラグスロット (PCIe EM スロットなど) の構成に失敗します。

cfgadm コマンドでは次のエラーメッセージが表示されます。

```
# cfgadm -c configure slot-name
```

```
failed to probe the Connection slot-name
cfgadm: Hardware specific failure: configure failed
```

hotplug enable コマンドでは次のエラーメッセージが表示されます。

```
# hotplug enable slot-name
```

```
ERROR: hardware or driver specific failure.
```

回避方法: -f オプションを付けて hotplug enable コマンドを使用します。

```
# hotplug enable -f connector/slot-name
```

例:

```
# hotplug enable -f Slot1
```

ネットワーク接続に関する注意事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 でのネットワーク関連の問題について説明します。

SPARC:T2 および T3 シリーズのプラットフォームで IPsec パケットが欠落することがある (7184712)

SPARC T2 および T3 プラットフォームでは、ドメイン上の 1 つ以上の CPU がどの Control Word Queue (CWQ) にも関連付けられていない場合、IPsec パケットが欠落する可能性があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
Thread[3000b87c000] is already bound to CPU[1] which is not associated with any CWQ
```

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- `dladm` コマンドを使用して、CWQ に関連付けられている CPU へのデータリンクをバインドします。

```
# dladm set-linkprop -p cpus=comma-separated-list-of-processor-IDs link-name
```

- システム上のすべての CPU が CWQ に関連付けられるようにドメインを再構成します。

1. `ldm` コマンドを使用して、ドメイン上にある仮想 CPU (VCPU) と暗号化ユニット (MAU) をチェックします。

```
% ldm ls -l domain-name
```

詳細は、`ldm(1)` のマニュアルページを参照してください。

2. CPU が暗号化ユニットに関連付けられていない場合は、`psradm` コマンドを使用してその CPU をオフラインにします。

```
% psradm -f processor-ID
```

詳細は、`psradm(1)` のマニュアルページを参照してください。

ネットワークトラフィックとのインタフェースに対する `tshark` コマンドの実行時にシステムがハングアップすることがある (7202371)

ネットワークトラフィックとのインタフェースに対して `tshark` コマンドを実行すると、システムがハングアップすることがあります。

回避方法: tshark または wireshark コマンドではなく、snoop コマンドを使用します。

インストール後はじめて **Automatic NCP** から **DefaultFixed NCP** に切り替えるとネットワークに到達できなくなる (15824547)

Oracle Solaris 11.1 をインストールしたあとのネットワークの構成処理中に、Automatic ネットワーク構成プロファイル (NCP) から DefaultFixed NCP に切り替えると、ネットワークに到達できなくなることがあります。この動作は、Automatic NCP から DefaultFixed NCP にはじめて切り替えているとき、インストールのあとのシステムのリポート時に発生します。DefaultFixed NCP ネットワーク構成が有効であっても、ネットワークに到達できなくなることがあります。

注- この動作は、大域ゾーンと非大域ゾーンの両方で発生する可能性があります。

ping コマンドを実行すると、次のメッセージが表示されます。

```
# ping 192.168.10.3
ping: send to Network is unreachable
```

デフォルトのネットワーク構成モードがリアクティブ NCP から DefaultFixed NCP に切り替えられたときに、システムが IP フィルタサービスの無効化に失敗した場合は、ネットワークに到達できません。次のコマンドを実行すると、IP フィルタサービスのステータスを確認できます。

```
# svcs ipfilter
STATE          STIME          FMRI
online         Oct_17         svc:/network/ipfilter:default

# ipfstat -io
block out log all
pass out quick on lo0 all
pass out quick proto udp from any to any port = bootps
block in log all
pass in quick on lo0 all
pass in quick proto udp from any to any port = bootpc

# ipfstat -io6
block out log all
pass out quick on lo0 all
pass out quick proto udp from ::/0 to ::/0 port = dhcpv6-server
pass out quick proto ipv6-icmp from ::/0 to ::/0
block in log all
pass in quick on lo0 all
pass in quick proto udp from ::/0 to ::/0 port = dhcpv6-client
pass in quick proto ipv6-icmp from ::/0 to ::/0
```

回避方法: `svc:/network/location:default` SMF サービスをリフレッシュします。

```
# svcadm refresh svc:/network/location:default
```

デスクトップに関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのデスクトップに関する問題について説明します。

新規インストール後に **Evolution** アプリケーションがクラッシュする (7077180)

Oracle Solaris のインストール後に Evolution 電子メールアプリケーションが起動しません。

回避方法: Evolution のインストール後に、ログアウトしてから再びログインします。アプリケーションが正常に起動します。

SPARC: USB キーボード、マウス、および物理モニターに関するデスクトップの問題 (7024285)

物理キーボード、マウス、またはモニターを使用しているときに、Oracle Solaris デスクトップ上で端末ウィンドウを何度も開いて使用しようとする、文字やマウスの制御が失われることがあります。

この問題は、マイクロフレームの消失によって発生するエラーが原因で起こることがあります。これらのエラーは、全速または低速の USB 1.0 または 1.1 キーボードおよびマウスデバイスがシステム上のオンボード USB 2.0 ハブの下の USB ポートに接続されているときに発生します。しかし、キーボードおよびマウスデバイスがシステムの USB ポートに接続され、それが `ohci` (USB 1.0 または 1.1) ドライバに手動でバインドされた内部ハブに接続されているときは、これらのエラーは発生しません。

注- 仮想キーボードおよびマウスを使用している場合は、ハブの下のすべてのデバイスが強制的に低速で動作します。デバイスは引き続き機能しますが、低速の USB 1.0 または 1.1 で動作します。

回避方法: `/kernel/drv/ehci.conf` ファイルの `ehci-port-forced-to-companion` 変数の値を設定します。この変数の値は、`ehci` (USB 2.0) ドライバが USB コントローラ上の特定のポートの制御を解放するために使用します。

ehci-port-forced-to-companion 変数の値は、プラットフォームのタイプと使用される USB デバイスのタイプによって異なります。次の表に、推奨される USB コネクタの使用法と対応する ehci-port-forced-to-companion 変数の値を示します。

表 4-1 推奨される USB コネクタの使用法と値

SPARC プラットフォーム	USB デバイスのタイプ	推奨される USB コネクタの使用法	/kernel/drv/ehci.conf ファイルの ehci-port-forced-to-companion 変数の値
T3-1、T3-2、T4-1、 T4-2	物理キーボードまたは マウス	前面 USB コネクタを使 用します	4
T3-4、T4-4	物理キーボードまたは マウス	背面 USB コネクタを使 用します	3
T3-1、T4-1、T3-2、 T4-2、T3-4、T4-4	仮想キーボードまたは マウス	なし	2

この回避方法を実装するには、次の手順を実行します。

1. USB デバイスを接続します。
各種のプラットフォーム上のデバイスに対して推奨される USB コネクタは、表 4-1 に一覧表示されています。
2. /kernel/drv/ehci.conf ファイルの ehci-port-forced-to-companion 変数の値を設定します。
たとえば、SPARC プラットフォームが T3-4 であり、物理キーボードを使用している場合は、ehci-port-forced-to-companion=3 を設定します。
この変数に設定できる値の詳細については、表 4-1 を参照してください。
3. システムをリブートします。

```
# init 6
```

D-Bus システムデーモンに設けられた Sun Ray または XDMCP サーバーの使用に対するファイル記述子の上限が小さい (7194070)

Sun Ray または XDMCP サーバーの使用時に、D-Bus システムデーモンはディスプレイごといくつかのファイル記述子を使用します。256 というデフォルトのファイル記述子の上限では、同時に少数のクライアント接続しか許可されません。Oracle Solaris 11.1 で動作する Sun Ray または XDMCP サーバーは、ファイル記述子の上限を超えると、新しいディスプレイの管理を停止します。

30-40 のクライアント接続のあとでファイル記述子の上限を超える可能性があります。この数字は、デスクトップセッションで使用されるプログラムおよびパネルアプレットの種類に応じて変わることがあります。

回避方法: Sun Ray または XDMCP の使用をサポートするよう
に、`/lib/svc/method/svc-dbus` ファイル内のファイル記述子の上限を大きくします。

`/lib/svc/method/svc-dbus` ファイル内の 40 行目を次から:

```
/usr/lib/dbus-daemon --system
```

次に変更します。

```
ulimit -S -n 8192 ; /usr/lib/dbus-daemon --system
```

グラフィックスと画像処理に関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのグラフィックスと画像処理に関する問題について説明します。

x86: NVIDIA グラフィックスチップセット上で ビットマップコンソールが正しく表示されない (7106238)

NVIDIA グラフィックスアダプタが搭載された一部のシステムでは、Xorg サーバーが実行されたあと、テキストモードコンソールが正しく表示されません。Xorg サーバーからテキスト仮想端末に切り替えると、コンソールが判読可能な文字ではなく垂直バーとして表示されます。

回避方法: ビットマップコンソールを無効にします。代わりに、VGA モードのテキストコンソールを使用します。

x86: X サーバーを UEFI モードで起動すると、バンドル版のドライバがパニックになる (7116675)

X サーバーを UEFI モードで起動すると、バンドル版の NVIDIA ドライバがパニックになります。

回避方法: GRUB メニューで、指定されたブートエントリの `$multiboot` 行の前に次のテキストを追加します。

```
[...]
cutmem 0x9b000 1M
$multiboot /ROOT/transition/@/$kern $kern -B console=graphics -B $zfs_bootfs
```

この変更を永続的にするには:

1. custom.cfg ファイルを rpool/boot/grub 内に作成します。これは、grub.cfg ファイルが含まれているものと同じディレクトリです。

custom.cfg ファイルの作成と管理の詳細は、『Oracle Solaris 11.1 システムのブートおよびシャットダウン』の「GRUB 構成のカスタマイズ」を参照してください。

2. メニューエントリを grub.cfg ファイルから custom.cfg ファイルにコピーします。grub.cfg ファイル内のメニューエントリは次のようになっています。

```
menuentry "s11sru" {
    insmod part_msdos
    insmod part_sunpc
    insmod part_gpt

    insmod zfs

    search --no-floppy --fs-uuid --set=root f3d8ef099730bafa
    zfs-bootfs /ROOT/s11sru/@/ zfs_bootfs
    set kern=/platform/i86pc/kernel/amd64/unix
    echo -n "Loading ${root}/ROOT/s11sru/@$kern: "
    $multiboot /ROOT/s11sru/@/$kern $kern -B $zfs_bootfs
    set gfxpayload="1024x768x32;1024x768x16;800x600x16;
        640x480x16;640x480x15;640x480x32"
    insmod gzio
    echo -n "Loading ${root}/ROOT/s11sru/@/platform/i86pc/amd64/boot_archive: "
    $module /ROOT/s11sru/@/platform/i86pc/amd64/boot_archive
```

3. cutmem コマンドを \$multiboot エントリの前に追加します。

次の例に太字で示されている情報が custom.cfg に追加されます。

```
menuentry "s11sru" {
    insmod part_msdos
    insmod part_sunpc
    insmod part_gpt

    insmod zfs
    # Workaround for nVIDIA Driver
    cutmem 0x9b000 1M
    # End Workaround for nVIDIA Driver
    search --no-floppy --fs-uuid --set=root f3d8ef099730bafa
    zfs-bootfs /ROOT/s11sru/@/ zfs_bootfs
    set kern=/platform/i86pc/kernel/amd64/unix
    echo -n "Loading ${root}/ROOT/s11sru/@$kern: "
    $multiboot /ROOT/s11sru/@/$kern $kern -B $zfs_bootfs
    set gfxpayload="1024x768x32;1024x768x16;800x600x16;
        640x480x16;640x480x15;640x480x32"
    insmod gzio
    echo -n "Loading ${root}/ROOT/s11sru/@/platform/i86pc/amd64/boot_archive: "
    $module /ROOT/s11sru/@/platform/i86pc/amd64/boot_archive
```

パフォーマンスに関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのパフォーマンスに関する問題について説明します。

x86: stmsboot コマンドを -e オプション付きで実行したあとに ZFS プール情報が無効になる (7168262)

stmsboot コマンドを -e オプション付きで実行して次のブート時に MPXIO (マルチパス) 機能を有効にしたあと、しばらくして ZFS プールのデバイスパス情報が無効になります。結果として、zpool.cache が適切に更新されません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- stmsboot コマンドを -e オプション付きで実行した直後にシステムをリブートします。次に、システムを再度リブートします。
- stmsboot コマンドを -e オプション付きで実行した直後に zpool status コマンドを実行します (zpool.cache が手動で更新されます)。

SSD デバイスのプールにかかるキャッシュされないランダム書き込みワークロードのパフォーマンスが低い (7185015)

SCSI unmap コマンドをサポートする半導体ディスク (SSD) の ZFS ストレージプールにかかるキャッシュされないランダム書き込みワークロードのパフォーマンスが非常に低下します。

回避方法: /etc/system ファイルで、次の行を追加して、ZFS unmap リクエストのオーバーヘッドを無効にします。

```
set zfs:zfs_unmap_ignore_size=0
```

ハードウェアに関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのハードウェアに関する問題について説明します。

x86: システムのブート中に CPU の電源レベル警告が表示される (7146341)

特定の状況下で、システムのブート中に次の警告が表示されます。

```
WARNING: Device /fw/cpu@2 failed to power up.  
WARNING: cpudrv_monitor: instance 1: can't raise CPU power level
```

回避方法: この警告は無視します。システムがブートすれば、システムの通常の動作に影響しません。

SPARC: Fujitsu M10 システムで hotplug によって PCI ボックス上のデバイスを構成できない (7196117)

Fujitsu M10 システムでは、Oracle Solaris ホットプラグフレームワークを使用し、PCI (Peripheral Component Interconnect) ボックスを完全に構成することはできません。I/O デバイスのノード構成はプラットフォームごとに異なり、リソース割り当ては固定値を持つ `pcicfg_slot` 変数によって割り当てられます。

```
# Fixed values for resource allocation  
[ uts/sun4/io/pcicfg.c ]  
static int pcicfg_slot_busnums = 8;  
static int pcicfg_slot_memsize = 32 * PCICFG_MEMGRAN; /* 32 MB per slot */  
static int pcicfg_slot_iosize = 16 * PCICFG_IOGRAN; /* 64 K per slot */
```

MEM64、MEM32、および I/O デバイスのリソースは、子デバイスごとに固定値によって割り当てられます。たとえば、4つの子デバイスを構成するには、`pcicfg_slot_busnums` 変数の値を 32 に設定するようにします。

ただし、Fujitsu M10 プラットフォームの Open Boot PROM (OBP) は PCI ボックスの構成をサポートしているため、PCI ボックスを使用すると Oracle Solaris を正常にブートできます。この問題は、Oracle Solaris ホットプラグフレームワークでのみ見られません。OS は PCI ボックスを使用してブートできますが、hotplug によって認識されません。

回避方法: PCI ボックスを使ってシステムを構成するには、次の手順を実行します。

1. `/etc/system` ファイルで、`pcicfg:pcicfg_slot_busnums` 変数を設定します。

```
set pcicfg:pcicfg_slot_busnums = 4
```

2. システムをリブートします。

```
# reboot
```

ローカリゼーションに関する注意事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11.1 リリースでのローカリゼーションに関する問題について説明します。

UTF-8 以外のロケールで、非 GTK アプリケーションから ATOK 言語エンジンへの接続が失敗する (7082766)

UTF-8 以外のロケールで Internet/Intranet Input Method Framework (IIIMF) が ATOK 日本語言語エンジンと組み合わせて使用されているときは、非 GTK アプリケーション (X および Java アプリケーション) が入力方式フレームワークへの接続に失敗します。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- IBus 入力方式フレームワークを Anthy 言語エンジンと組み合わせて使用します。
- IIIMF を Wnn 言語エンジンと組み合わせて使用します。



以前に記載され、Oracle Solaris 11.1 リリースで修正されているバグ

この付録には、『Oracle Solaris 11 ご使用にあたって』に記載され、Oracle Solaris 11.1 リリースで修正されているバグが一覧表示されています。

BugDB 内のバグ情報にアクセスする方法については、MOS で使用できる [Sun Systems Defects Move to Oracle's Bug Database \(Doc ID 1501467.1\)](#) のナレッジ記事を参照してください。

以前に記載され、このリリースで修正されたバグ

CR 番号	タイトル
7052679	umask の制限が強いため、AI クライアントのブートが <code>wanboot.conf</code> エラーで失敗する
7098861	プロファイルを選択するには、ホスト名条件とクライアントから返されたホスト名が厳密に一致する必要がある
7087888	DNS が有効化されていない場合に <code>installadm create-service</code> が不完全な DHCP 構成を作成する
7090563	<code>sysconfig create-profile</code> が共有 IP ゾーンのネットワークの構成に失敗する
7097083	<code>sysconfig create-profile</code> がローカルユーザーアカウントの作成を許可しない
7097468	Intel グラフィックスチップセットでビットマップコンソールが正しく表示されない
7095998	x86: NVIDIA グラフィックスによるレイヤーアクセラレーションによって Firefox が終了する可能性がある
7076162	複数の USB キーボードを同時に抜くと、システムパニックが発生する

CR番号	タイトル
7094923	s オプション付きの -dladm show-aggr コマンドが機能しない
7100050	ilomconfig サービスによってシステムのブートで遅延が発生する可能性がある
7107525	txzonemgr がラベル付きゾーンを複製できない
7091692	ゾーンの準備ができているときはゾーンブート環境データセットがマウントされているべきである
7105597	DefaultFixed プロファイルが有効になっていない場合は ipadm コマンドが機能しない
7103136	ipadm コマンド
7070912	接続されている IEEE-1394 デバイスを切り離したり、電源切断したりすると、システムパニックになる
7097656	SPARC: テキストインストール時にネットデバイス名と通信デバイス名が不正にマップされる
7093885	FMA ディスクトポロジ検出が、直接接続されたディスクと仮想ディスクが混在する構成を処理しないことがある
7054074	cxge ドライバの別名が既存ドライバの別名と競合する
7075285	iSCSI または SAS デバイスで SCSI-2 reserve コマンドを利用すると、システムパニックが発生する
7028654	tar コマンドによるテープからのアーカイブの抽出に失敗する
7082198	非大域ワークスペースで IBus 言語パネルが表示されない
7082222	IIM 入力方式構成ツールがトラステッドパス内で実行される
7054074	cxge ドライバの別名が既存ドライバの別名と競合する
7099457	xterm-256color 端末タイプがサポートされていない
6988653	fc-fabric SMF サービスを無効にすると、システムのブートで問題が発生する
7096091	CPU 電源管理の間違った BIOS エントリにより、システムパニックが発生する可能性がある
7101169	非大域ゾーンで構成解除が失敗する
7092679	JRE がシステムのデフォルトタイムゾーン設定の検出に失敗する
6893274	x86: 所有者なしの相互排他ロックによりシステムパニックが発生する
7070558	automount サービスが無効になっていると、useradd が、ホームディレクトリにアクセスできないユーザーを作成する

CR 番号	タイトル
7100859	SPARC: ダイレクト I/O を使用してマルチソケット T シリーズシステム上のプライマドメインから複数の PCIe スロットを削除すると、ブート時にシステムパニックになることがある
7082515	ローカルのホームディレクトリがマウントされないことがある
7087781	制御ドメインに仮想スイッチを追加したあと、最初のブートで <code>datalink-management</code> サービスがタイムアウトする
